

## プロローグ

人里離はなれた森の近くに、一軒の教会が建っていた。

白い壁に緑色の屋根の建物で、近くには大きな木が寄り添うように佇んでいる。

周囲はなだらかな平地だ。背の低い緑の草が大地を埋めて生い茂り、あちこちで白や黄色の花が柔らかな風に揺れる。その中を一本の小道が緩やかに、もつとも近い……といってもお世辞にも近所とは言えない村への道のりを描いていた。

そこはかつて、大規模な戦争が行われた場所だった。人類の存続をかけた、巨大な魔物との戦い——暗黒大戦。世界中の人類が立ち向かった戦争の終結の地がここだ。

絶望と向かい合った決戦から、もう八十年以上たつ。

今では大勢が命を落とし血を流した場とは思えない、豊かな自然に恵まれた穏やかな景色が広がっていた。

その景色の中、緑と土の匂いをたっぷり含んだ心地いい風を浴びながら、ひとりの女性が玄関前を箒で掃いていた。

踝あたりまである白と黒の服は古めかしいデザインの修道服で、頭にも揃いの頭巾をかぶっ

ている。彼女はこの教会に暮らすシスターだ。もう何十年も、たったひとりでこの土地に住んでいる。

なにもない場所だ。教会と共に集落があったわけでもなければ、ここまではるばる救いを求めて人が来るわけでもない。

戦争が終わったあとどこからともなくやってきて、ここに教会を建て、以来ずっとこの土地を守るかのようにはひとりひっそり暮らしている。

彼女のかぶる頭巾の内側からは、微かに茶交じりの白髪が覗いていた。体はほっそりと痩せ気味で、箒を操る手もまた細く、皺に覆われている。穏やかな午後の陽光に自然と優しい微笑みを浮かべた顔も深い皺がいくつもあって、もう若い娘の張りからは程遠い。

それでも彼女は、濡れた大地の色を思わせる深い茶色の瞳を持つ彼女は、若かりしころの面影を失わず快活な生命力にあふれていた。

齢はもう百近いはずだと噂されている。けれどどうしてか、それにしてもあまりに若く見える容姿と身のこなしだ。

扉のすぐ近くでぼんやりしている小さな虫を見つけて、間違つて踏んではいけないとしゃがみ込んで摘み上げ、ひよいと草地へ放る動作もとても百近い老女とは思えない軽さだ。

「あ、いけない。いいお天気だったら森でなにか果物採ってこようと思つたのに、すっかり忘れてたわ……」

再び掃き掃除を再開しようとして、歳を重ねたシスターははたと気づき頬に手をあてる。手

製のベリージャムが昨日でなくなってしまうていたのを思い出した。明日はお願いしている食料品の配達があるから、残っている小麦でパンを焼こうと思っていたのに。

「今からじゃ駄目よねえ……日が暮れてしまうもの」

教会の後ろに広がる森を眺めて、シスターは残念そうにため息をついた。

何十年も出入りしている森は、もう庭のような気軽さで歩き回れる。もし足腰が十代のころのような丈夫さであったなら今からでも遅くはないだろうが、さすがに体がそれを許してはくれないだろう。

もつとも、十代のころはしよっちゅう道を見失って、ジャム用に採ってきた果物を食べながら何時間も森の中をさまよい歩いていたのだが。

「忘れっぽくて嫌ね。ふふつ、私ももう立派なおばあちゃんだわ」

仕方がないから、ジャムは明日にしよう。そう思っただけに手を添える。

だがそのときふと、シスターは空気のおいかわったことに気づいて顔を上げた。

血のおいにする。そう思っただけの瞬間、彼女は森からなにかが飛び出してくる物音を聞いた。

草を踏むふたつの音は、二足の動物のもの。いや動物というより、これは人の足音だった。

シスターは箒を扉の脇に立てかけると、長い修道服の裾を持ち上げて教会の裏手へ駆け出す。すぐに見つけた。小さな人影がふたつ、こちらに向かって歩いてきている。

そのうちの先頭を行く姿を目に留めた途端、シスターは思わず足を止めた。両手で口を覆っ

て目を見開く。驚いた。

シスターを見つけてわずかに歩調を速めた人影は、正確には人ではなかった。

背は人間の子供程度、全身は白と茶色のツートーンの体毛で覆われていて、先が二股に分かれた長い尾を低く下げている。羽織った上着のフードには三角の耳が取り付けられていて、その下には本物の三角耳が隠れているはずだ。

歩み寄ってくる人物は二足で立つ猫の姿をしていた。獣人だ。今はもう世界中に数えるほどしかない、希少な種。

だがシスターが驚いたのは、珍しい獣人を目撃したからではない。それが自分の姉の夫、何十年も顔を合わせていなかった義兄だったからだ。

「獣兵衛さん！」

名を呼び、我に返ってまた走る。血のおいだ。近づいてくる獣兵衛から漂ってきている。目の前まで駆け寄って、シスターは再度驚く。どこか怪我でもしているのかと思っていたが、間近でよく見ると一つや二つの怪我ではなく全身傷だらけだったのだ。

フードの下から覗く猫の顔は額から出血しており、黒く変色した血が茶色い毛を汚している。服は埃と血で不穏な斑模様になっていた。傷を押さえているのか、腹部に巻きつけられたポロ布には赤黒い血がべったりと滲んでいる。

その姿からなにかあったのかを推し量ることはできない。けれどなにかがあったことだけは、その血が鮮烈に物語っていた。

「久しぶりだな、シスター」

猫の口を歪ませて、負傷した獣人、獣兵衛は皮肉っぽく笑った。

シスターはその場に膝をついて目線を義兄と合わせた。近づくとなお一層不穏な臭いが濃く感じられて、悪寒が背筋をくすぐっていく。

「久しぶりですけど、まあなんてこと……傷だらけじゃないですか。一体どうしたつていうの、獣兵衛さん？」

「色々あってな。悪いが、事情を全部説明している時間はない」

楽な状態ではないだろうに、ボロボロに傷ついた猫人は苦痛をにおわせない平常の声色で答える。

そんな様に眉を寄せて、シスターは反射的に手を獣兵衛の額にかざした。だが数秒のうちに、その手を力なく握りこむ。

「ああ……そうだったわ。もう治してあげられないんだった」

かつてこの手には治癒の力があつた。触れて念じるだけで傷を癒し、痛みを遠ざけることができた。だがその力も歳を重ねるごとに徐々に薄れ、数年前にはすっかり失われてしまった。

獣兵衛が小さく首を振る。

「気にすることはない。かすり傷だ。そんなことよりお前に頼みたいことがある」

「頼み？」

尋ねながら、シスターはなにを託されるのか薄く察していた。

獣兵衛は小さな子供を背負っていた。少年だ。ぐったりともたれかかった体は力なく、気を失っているか深く眠っているかのどちらかだろう。

後方にはもうひとり少年がいた。こちらは獣兵衛に背負われている少年よりもいくつか年上のようで、荒い呼吸に痩せた肩を上下させながら、まるで手負いの獣のようにシスターを見つめ睨んでいる。彼の腕の中にももうひとり、こちらは小さな少女がやはり意識なく身を預けていた。

三人の子供。よく似ている。不健康なほど白い肌に薄汚れた金色の髪。瞼を持ち上げているのは自分の足で立っている年上の少年だけだったが、彼の風貌からするにきつと三人とも美しい緑色の瞳を持っているのだろう。

「この三人を預かってくれ。この教会に置いて、育ててやってほしい」

そう言つて獣兵衛は背に載せていた少年をシスターに渡そうとする。

だがその前に、後方にいた少年が自分と同じくらいの位置にある獣兵衛の肩を掴んだ。傷だらけの腕で、抗議するように強く。

「心配するな。シスターなら大丈夫だ。いや……シスターでなければ駄目なんだ。ここ以上に安全な場所はない」

なだめるように獣兵衛が語りかける。

だが少年は緑色の瞳を鋭く尖らせ、眠る少年に触れることを許さないとばかりにシスターを眼光で射貫いていた。

「大丈夫だ。信じろ。ラグナ」

もう一度獣兵衛が拒む少年を説く。

その低く窘めるようでもあった呟きに、小さくシスターが息を呑んだ。

「……ラグナ？」

思わず唇からこぼすように呼んだ。

その名に弾かれたように、少年が獣兵衛の肩から手を離して腕に抱く少女を隠すように身を引いた。

まるで怯えた子犬のようだ。傷ついて空腹で苦しくて、だけど自分より小さな者を守らねばと懸命に足を踏ん張り牙を剥く。そんないじらしい姿に、シスターは微笑みを浮かべて温かく少年を見つめた。

「貴方、ラグナというの？」

向けられた視線にか、声色にか、それとも言葉にか、少年は戸惑ったようにうろたえ、獣兵衛を見て、その背の少年と自分の腕の中の少女を見た。それからためらうようにシスターへと視線を戻すと……警戒の針を向けながらも、小さく浅く頷く。

瞬間、シスターは胸に温かなものが灯るのを感じた。

まだ若かったころ。目尻に深い皺もなく、髪も白くなかったころ、出会い、そして別れた人を出す。

少年はあの人によく似ている。そして記憶の中のあの人も、ラグナという名前を持っていた。

ああ。まるで魔法みたいだ。それとも奇跡だろうか。シスターは瞼を伏せると、感謝の祈りを捧げた。

その瞼が再び持ち上がるのを待って、獣兵衛が改めて背の少年を下ろした。シスターに差し出す。ラグナという名の少年は迷いながらも、今度は制止しなかった。

眠り続ける細い体を受け止めて、シスターは意識のない少年を胸に抱く。腕の中の小さな体の温もりが、シスターの過去の記憶をより鮮明にさせた。

「この少年がジンで、あいつが抱いている少女がサヤだ。それから今も言ったが、あいつの名前がラグナ」

獣兵衛が少年たちを順に紹介していく。

ジン、サヤ、ラグナ。

教えられた名前をシスターは胸中で何度も繰り返した。何度も何度も、大切なものを包み込むような温かさで何度も。

「ジンに、サヤ。そう、この子たちが貴方の、ラグナの弟と妹なのね」

「ん？ その通りだが……シスター、どうして知っている？」

「だって昔に聞いたんだもの。大切な弟と妹がいるって」

そう、ずっと昔に、あの人から聞いた。大事な約束を交わしたあの人から。

義兄はなにかを思い出すような目でどこか遠くを見やり、力を抜くように笑む。

そうか、と。低く独りごちるように呟いてから、改めてシスターを見た。

「こいつらを頼めるか」

普段ならば愛らしくもある猫の容姿で、獣兵衛は重く問う。

そんな重さをいとも容易く掬い上げるように、シスターは軽やかに顎を引く。

「もちろん。いいえ、むしろ私からお願ひするわ。この子たちの面倒をみさせて」

ジンの頭をそっと抱き寄せて、乞うようにシスターは言う。

涙が出そうだった。溺れるような嬉しきゆえだ。こんな未来が、こんな運命が待っているなんて、思ってもみなかった。

「この子たちを守る役目を、私にちょうだい」

シスターの言葉に、獣兵衛はため息をついて猫背の肩を落とした。安堵の吐息だった。

「ラグナ。彼女が……シスターだ」

一瞬、彼女の本名を告げるかどうか迷って、結局近年呼び慣れた呼称で紹介すると、獣兵衛は後方の少年を前へと出した。

彼はどうしたらいいのかわからないらしく、険しい表情を頑なに守ろうとしながらも困惑に瞳を揺らし、シスターを見る。

その強張った顔にシスターが手を伸ばすと、小さなラグナはびくりと肩を飛び上がらせ下がろうとした。

構わずにシスターは彼の頭へ手を置いた。ぽんぽん、と髪を押さえるように撫でる。

「初めまして。貴方たちに会えて嬉しいわ。ようこそ、私の教会へ。今日からここが貴方たち

の家よ」

温かく話しながら、シスターは思う。

遠い日に交わした約束。それが果たされる日をずっと待っていた。この日が来るのをずっとずっと待っていた。

ジャムを作らなかつたことを頭の隅で後悔する。もし作ってあつたなら、この子たちにお茶と一緒にジャムをたっぷり塗ったパンを食べさせてあげられたのに。

「お帰りなさい。ラグナ」

きつと声が震えていたせいだろう。

口を結んだまま警戒を緩められずにいるラグナの緑色の双眸に、一瞬心配するような色がよぎるから。

やっぱり、本当は優しい子なのだと思ってしまったから。

シスターは目尻から透明な雫をこぼしながら、喜びのままに少女のように微笑んだ。

——ねえ、覚えてる？

——あの約束を覚えてる？

——私は、会えたよ。

——ねえ、貴方は会えた？

近くに小川が流れ、すぐ裏手には実り豊かな森がある。そこはかつて、大きな戦争があった時代の決戦の地。けれど今は誰もが忘れた土地。緩やかで草深い草原の中、ぼつんと建つ小さな教会で。老いたシスターと二人の子供の慎ましくも賑やかな生活が、この日始まった。

——ねえ、ラグナ。あなたは私に、会えたかな。

## 第一章 Stratum city——階層都市

0

アーチ状に造られた白く高い天井に、慌ただしい足音がいくつも響いていた。

誰もが口々に警戒と攻撃指示を口にする。侵入者を捕まえろ、殺せ、これ以上進ませるな。そう叫ぶ声は叱咤や激励というよりもつと悲痛な音に引きつっており、ひどく追い詰められた状況を如実に物語っていた。

廊下の先から聞こえてくるそれらを聞きながら。

彼は迷いや躊躇いなど微塵もなく、いつそ悠然とした振る舞いで、近付いてくる足音のほうへと進んでいた。

白い髪に、左が緑で右が赤という左右で色の違う瞳。がっしりした体つきに黒い服を纏い、その上に目の覚めるような真っ赤なコートを羽織っている。

(……後から後から、よく集まってくるもんだ)

ぼやくように思いながら、彼はそれまで肩に担いでいた幅広で分厚い刀身の剣を手にとら下

げる。

身を隠すつもりは毛頭なかった。むしろ向こうが見つけて仕掛けてくるなら、その都度叩きのめすのが彼のやり方だ。

ここそやるのは性に合わない。どうせ目立つならできるだけ派手に振る舞って、いつか自分の襲来を聞いただけで連中が逃げ出すようになればいいと思う。

もともと、そんな虫のいい話はないだろうと思ってもいるが。

すぐに青と白を基調とした制服に身を包んだ男が五、六人、銃を抱えて走り込んでくる。

こちらの位置に気付いていなかったのか、はち合わせた途端に先頭の数名が動揺して足を止めた。

だが彼は止まらない。歩みを疾走に変えて一直線に突っ込むと、手の剣を大きく振りかぶった。

「止まれ！ 止まらなければ撃つ！」

制止の声に意味はない。

制服姿の男たちがそれぞれに銃を構えた。即座に全員が発砲する。けたたましい発砲音が廊下に響く。

が、その直後、彼は振りかぶった剣を勢いよく薙いだ。

「うらあああああつ！」

剣から黒く禍々しい揺らめきが放たれて宙を駆け、迫る銃弾のすべてを呑み込んで掻き消し

てしまう。

揺らめきはそのまま炎の速さで走り、次弾を浴びせる制服たちへと迫ると一息に吹き飛ばした。

ごう、と炎が逆巻くような音が巻き起こり、男たちの体は悲鳴ごと攫われて壁に叩きつけられる。衝撃に負けて、壁に太くヒビが走った。

たった一撃。それだけで、銃を構え勇ましくも侵入者を迎え撃とうとしていた男たちは全員、意識を失い廊下に倒れ伏した。

「……倒されるってわかってんだから、のこのこ出てくんじゃねえよ。馬鹿が」

あつけないものだ。倒れた制服姿を横目に見やると、大きな剣を携えた彼はすぐさま廊下を走り出す。

いつまでもこんなところで時間を食っている場合ではない。

向かうのはこの施設の一番奥、最下層だ。

また廊下の奥から青と白の制服姿が現れる。口々に叫びながら銃を構え、あるいは剣を抜いた。

人数はさつきよりも多い。が、だからといって彼のやることに変わりはない。

真正面から突っ込んで、すべてを振り払い叩きのめす。

次々に制服姿の力ない体が廊下のあちこちに転がり、セキュリティ装置はことごとく破壊され、口を閉ざす扉すら叩き切られて鉄くずに変えられた。

彼はなにもひっそりとここに忍び込んだわけではない。扉を守る警備員を殴り倒して、正面から堂々と侵入したのだ。

まるで自分の力と存在を誇示し深く爪痕を残すように、彼は暴れに暴れて手あたり次第に破壊し、奥へと進んだ。立ちほだかるものはなんであろうと斬り倒す。そんな暴力的な歩みで進んで、進んで……。

そうして彼が到達したのは、長い長い昇降装置で降りた先の、ぼっかりと口を開けたような地下深い広間だった。

……そこはもう、これまで通ってきた廊下や部屋とは違う世界だった。  
空気が違う。温度が違う。

床も壁も天井も金属に似た質感の板で覆われており、広場を見下ろす位置にガラス張りの小部屋が設けられている。その下にも重厚な機械類が並んでおり、それらが見据える先で異様に大きななにかの装置が沈黙していた。

人は誰もいない。ここにいたはずの人間は皆、襲撃の知らせを受けて避難したのだろう。そしてここに駆けつけるはずの人間は皆、白髪の侵入者が蹴散らしてしまった後だ。

一步一步、彼は広間の奥に鎮座している巨大な装置へと足を進めた。  
異質さが体にまとわりつくようだった。

この世でありながら別の世であるかのような、本能が警告する違和感のようなものが空気の代わりに漂っている。

けれど彼には、慣れた空気だった。

もう幾度もこういうところにはやってきているのだ。ここと同じ構造をして、同じ装置を地下に隠した施設を、これまでいくつ訪ねたかわからない。

毎度、訪問の目的はひとつ。

この巨大な装置の破壊だ。

彼は床を踏みしめるようにして歩み寄る。

これがなんのために存在しているのか。ここで働いていた者のどれほどが把握していたのだろう。

来るたびに彼は棘のような疑問を感じる。

これがなにをもたらすと思つて、毎日毎日こんな陰気臭い地下深くまで降りてきて、用途もわからないチカチカ光る計器をいじくり回していたのだろう。

縁まで来ると、彼はそれを睨み据える。

銀色の金属で組み立てられた装置は、見上げるほどに高くそびえ、見下ろすほどに深く大きかった。

メインとなる部分は、彼が見下ろす円形の部分だ。

これは『窯』だった。

今はいくつもの金属板が折り重なるようにして口を閉ざしているが、開けば内は火山の火口のようになっている。炎色の溶岩のようなものが渦を巻いて、覗き込む者のすべてを呑み込みんと燃え盛っているのだ。

だが中でわだかまつているものは、決して溶岩や炎などではない。

そこにあるのは異界だ。人が本来あるべきではない、世界のひずみ。走った亀裂の向こう側。見てはいけなかった、踏み込んではいけなかった世界の殻の外側。

彼が見下ろす金属の装置はこの窯を制御し、また窯に干渉するためのものだ。

本来及ぶべきものではない異界——境界に触れるための装置。

彼は、世界中に散らばるこの窯を破壊して回っていた。

こうして眺めてみても、今更感慨もない。

彼は剣を腰に戻すと、右手を装置へと向けて突き出した。何事か呟く。もう何度も繰り返しかくしてきた、破壊をもたらす言葉。

言葉は彼の右腕で眠っていた力を呼び起こし、力は彼の右腕に蒼い光を生んだ。

瞬く間に辺りを埋め尽くすほどに増幅された光を、彼は装置に向けて思い切り放つ。

次の瞬間、地下深くで口を閉ざしていた異界への門は、それを囲む広大な部屋ごと跡形もなく吹き飛んだ。

第九階層都市アキツ、世界虚空情報統制機構支部。

都市の中心に建っていた施設が何者かの襲撃によって崩壊し、その騒動で都市全体が混乱している中。

赤いロングコートを着た白髪の男はひとり、ひっそりと都市から去ろうとしていた。

もうここでやるべきことは終わった。長居は無用だ。

施設での派手な立ち回りに反して、外では人目につかぬよう入り組んだ道を通り、できるだけ薄暗い出口を選んだ。

街中で制服を着た衛士たちに見つかれば、振り払うために戦わねばならない。それが煩わしい。

錆臭い鉄門をくぐって、奥にあるポートへ向かう。その脇にある通路を下れば外に出られるはずだ。

そのときふと、薔薇らの香りが彼の鼻孔をくすぐった。

「まるで行き場を失った野良みたいね」

淡々とした嘲りの声が聞こえ、彼は足を止めて振り向いた。傍らに佇む細い外灯を見上げる。

先端が二股に分かれたシンプルなプルなその上に、ひとりの少女が立っていた。

歳は十を過ぎて数年といった程度だろうか。まだ幼い顔立ちをしながらも、足元からの薄暗い明りに照らされて浮かぶ赤い瞳は外見の年頃に似合わぬ聡明さをたたえている。

下方の彼を見やって、少女は薄く微笑んだ。

「薄汚い迷子の野良犬さん。次に貴方が行くべき場所を教えてあげましょうか？」

「……なに企んでいやがる。今まではそんなこと、教えなかったじゃねえか」

吐き捨てるように、彼は低く呻いた。

少女は呆れたように眉尻を下げる。

「心外ね。教えてきたじゃない。……もう何度も」

「はあ？ なに言っただテメエ」

「覚えていないならいいのよ。期待もしていないわ」

指に絡まった糸くずでも払うように言うと、少女はある方向をその白く小さな手で示した。

その先に広がるのは暗雲を抱く暗い夜空。星も月もない夜はまるで不穏な予感を搔きたてようとするかのように、重苦しく静かだった。

「第十三階層都市カグツチ」

そこが、貴方が導かれるべき場所よ。

そう告げると、少女は薔薇の香りを漂わせ、風が吹き抜けるように姿を消した。

甘い花の香りが消えると、白昼夢から現実を引き戻されたかのように、どこからか金属と腐った水の臭いが漂ってくる。

気分のいい場所ではない。

「カグツチ……ね」

別に行き先などどこでもいい。カグツチなら、ここアキツからでもそう遠くはない。

彼は忌々しげに少女の消えた辺りを睨みつけると、示された次の目的地を目指して歩き出した。

数日後、彼の名は世界中に指名手配犯として公開された。

ラグナザラッドエッジ。

それが『死神』の異名を持つ、史上最高額の賞金首の名だった。

この続きは1月19日発売のドラゴンブックで！

© ARC SYSTEM WORKS

© 2013 Mako Komao